



まんが甲子園の海外展開

高知県文化厚生スポーツ部文化国際課まんが王国土佐室 主査 岡松 泰暁

まんが文化の推進

高知県は「アンパンマン」の作者であるやなせたかし先生をはじめ、多くの著名な漫画家を輩出するなどまんが文化が地域に根付いていることから、「まんが王国」を全国に先駆けて宣言し、まんが王国・土佐のブランド化に取り組んでいます。

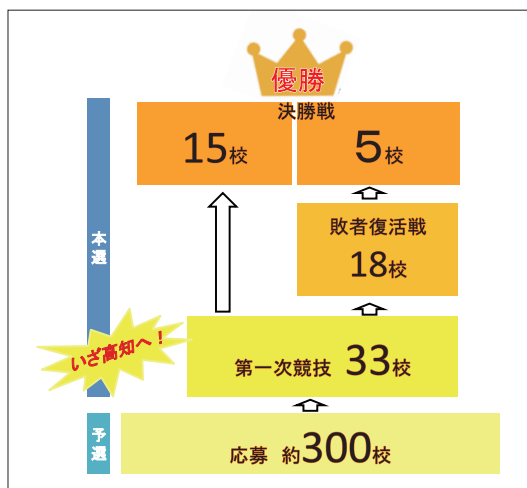
まんが王国・土佐を代表する取り組みとして、本稿では、「まんが甲子園（正式名称：全国高等学校漫画選手権大会）」を紹介します。

まんが甲子園とは

まんが甲子園は、高校生のまんがチーム No.1 を決める競技大会で、高校生が3～5人のチームを組み、与えられたテーマから1枚のまんがを作成します。

今年で第31回目を迎えましたが、参加する高校生の貴重な経験となるだけでなく、学校関係者からも高い教育効果が評価されています。

例えば、2日間の本選大会においては、1競技あたり約5時間という限られた時間で作品を仕上げることが必要であり、発想力や表現力だけでなく、協調性や集中力を養うことができるということで、高い評価を得ています。



文化部によるコンテストということから、穏やかなイメージを持たれるかもしれませんが、本選大会は、非常にエキサイティングで、涙あり感動ありの熱戦が繰り広げられています。

海外校の参加

まんが甲子園には、これまで国内校だけではなく、多くの海外校が参加しています。

2014年に韓国的高校がオープン参加したことを皮切りに、台湾、シンガポール的高校からも作品を募集し、2017年以降は毎回海外から3校（上の3つの国・地域からそれぞれ1校ずつ）が本選大会に参加しています。

海外校は、文化や言葉の壁というハードルがあるものの、2018年に開催した第26回大会で韓国の全南芸術高等学校が最優秀賞に輝くなど、優れた作画力やアイデアを発揮した作品を生み出しています。

予選を通過した海外校は、日本の大会に参加できることへの期待もありますが、異国の地に初めて訪れる方には言葉や食事など不安も多々あると思います。こうした不安を少しでも軽減できるように、各出場校の言語に対応した通訳の配置、アレルギーやハラルフードなどに対応するサポートを実施しています。



26回大会 最優秀賞作品
全南芸術高等学校 タイトル「123」

また、本選大会前に海外校から寄せられた問い合わせや大会ルールの翻訳などには国際交流員と連携し、英・中・韓国語の対応を行っています。

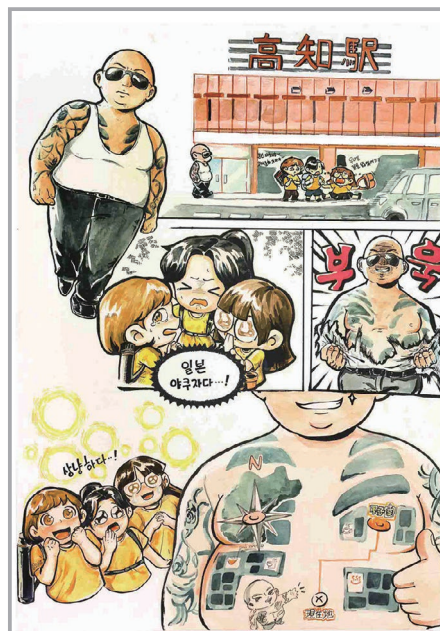
なお、海外から本選大会に参加する高校には1人あたり3万円の参加料をいただいておりますが、高知県までの旅費、高知県内での宿泊費および食事代などの大会に参加する費用のほとんどがこの参加料に含まれています。

2022年 第31回まんが甲子園 開催

今大会から世界中からの作品募集を開始したこともあり、予選には新しくタイからの応募がありました。

3年ぶりの現地開催となった本選大会では、国内から29校、海外からシンガポールの1校が高知県の会場に集まりました。また、新型コロナウイルス感染症の影響で渡航できなかった海外校2校（韓国、シンガポール）はオンラインで会場とつなぎ、初めてハイブリッド形式で開催しました。

ンで参加した韓国の全南女子高等学校が最優秀賞に選ばれました。



最優秀賞作品 全南女子高等学校 タイトル「やさしい世界」



会場の様子

オンラインで参加する2校については、大会のルールやスケジュールなどをZoomで事前説明するとともに、各校に現地スタッフを派遣することでオンラインでも支障無く大会に参加できる環境を用意しました。

2日間にわたる熱戦の結果、第31回大会はオンライン



オンライン表彰式の様子

今後の取り組み

高知を訪れたシンガポールの参加校には県内周遊ツアーを開催しました。このツアーは好評で、本選大会終了後のインタビューで、「高知で最も印象に残ったものは？」という質問に対して、参加選手全員が高知城と回答し、海外の高校生にも高知県をPRできる非常に良い取り組みになったと実感しています。

また、大会終了後には、出場校と地元高校の生徒同士の交流会を実施しました。作画競技だけでなく“まんが”という共通の話題を通じて多くの生徒から思い出深い会になったとの声をいただきました。

今後も、まんが甲子園をきっかけに海外交流を展開していきたいと考えています。